

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

ドイツにおける移民女性：その表現と表象

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 神戸市外国語大学外国学研究所 公開日: 2007-03-31 キーワード: 作成者: 濱崎, 桂子, Hamasaki, Keiko メールアドレス: 所属: |
| URL | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1188 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ドイツにおける移民女性—その表現と表象

濱崎 桂子

1. ドイツの「移民問題」— 一枚の布「スカーフ」をめぐる

ドイツにおける「移民」のイメージは、多くの場合「トルコ人」のイメージとして描かれる。事実上「移民受入国」であることを長く公式には認めず、伝統的に血統主義の国籍法を守ってきたドイツは、2000年に国籍法を一部改正し、長期滞在者の子供についてはドイツ国籍を認める政策をとった。いわば、「移民受入国」であることを限定つきとはいえ認めることになったわけだが、それと平行して、移民たちをいかにドイツ社会に同化させるかという議論も盛んになった。同じ2000年に、保守派の幹部が、ドイツに住む外国人はドイツの「指導文化」を身につけるべきであると述べ激しい議論を引き起こしている。この発言の背景にあるのは、お互いに交わることのない複数の「パラレルな社会」が存在していることへの、漠然とした不安である。マジョリティであるはずのドイツ人が理解できない言葉が話される地域、ドイツの公立学校での教育方針を拒否しようとする一部の移民たちに対して、いわば「郷に入っては郷に従え」と印籠を見せ付けようとしたのが、この「指導文化」議論だといえるだろう。確かに、トルコ系移民たちの中でも弱者層が集まるコミュニティには、多くの問題が山積している。2世、3世たちの学校教育と職業教育をめぐる問題、男性よりさらに教育、職業教育、就業の機会を得ることが難しい一部のトルコ人女性たちの権利をどのように守るかという問題である。

このような「問題」として語られるトルコ系移民たちのイメージは、メディアでも繰り返される。「危険な移民」たちは、しばしば、ナイフを持ったトルコ系の少年たちとして表象される¹。また、古い家族観や宗教的倫理にア

1 たとえば、ドイツの代表的な週刊誌『シュピーゲル』は、1997年7月28日号の

イデンティティを求めるコミュニティの中で、自由や権利を限定される女性たちは時に深刻な事件の被害者となる。当事者の意思を無視した「強制結婚」¹、「名誉の殺人」²などの問題は、多くの場合、社会に適応しようとしなない移民たちの排他性、あるいは「非文明性」にその原因が求められる。一方で、被害女性たちの声はホスト社会に届きにくく、「スカーフ」をつけた抑圧されたイスラム女性のイメージがメディアで繰り返されるのである。権利や保障についての情報を得にくい立場にいる一部の移民女性たちに対し、どこまで手を差し伸べることができるのか、一部のイスラム団体が主張する「イスラム固有の文化」と、ホスト社会の法との間でどのような折り合いをつけるのかなどの問題を前に、ドイツの移民政策はいまだに舵取りの方向が見えていない。こういった「移民問題」のシンボルとなった「スカーフ」着用の問題については、近年、ドイツにおいても政治的議論が繰り返されている。

イスラムを信仰する女性たちのスカーフが、ドイツで初めて法的な問題になったのは、1998年のことである。カブール出身の女性フェレシュタ・ルーディンが、バーデン・ヴュルテンベルク州の公立学校の実習生のポストに応募した際、「スカーフ」を理由に多くの学校でその受入れを拒否された。このときには、理解を示した学校で実習期間を終えたが、彼女が教員資格試験を受ける段階になって、あらためて「スカーフ」が州教育委員会で問題となる。当時、州文化・青少年・スポーツ省大臣であったアンネッテ・シャヴァーン（現連邦教育研究省大臣）は、「ルーディン氏がスカーフに宗教的な意味を付与していないとしても、公職に就くものとして、自身の宗教に属する人々、また同時に他の宗教に属する人々への影響というものを考慮するべきである」

表紙に『危険な異質性』というタイトルとともに「危険な」移民のイメージをカラーで示した。(図版1)

- 2 2006年4月、ベルリン州裁判所は、いわゆる「名誉殺人」事件についての判決を出した。事件は、2005年2月、クルド人の3人の兄弟が、自分の姉妹を「スカーフをせず」「ドイツ人女性のような娼婦になり」「イスラムの教えに背いた生き方をしている」として殺害したもの。裁判では、未成年の弟が犯行を認め、少年法により9年3ヶ月の禁固刑を言い渡されたが、成年に達している二人の兄は「実行には加わらなかった」と供述、証拠不十分として無罪となった。2006年11月現在、検察側が上告中。殺された女性は、強制結婚させられたトルコに住むいとこから逃げ、職業訓練をしながらベルリンで幼い息子と暮らしていた。この事件に対し、ベルリンのイスラム団体は、このような「殺人」はどんな宗教でも正当化され得ないと表明している。

と発言した³。シャヴァーン大臣が具体的に危惧したのは、これまでスカーフを身につけていなかったイスラム教の家庭の少女たちが、ルーディン氏の行為により、スカーフの着用を強制されることであった⁴。教員として不適正であると判断されたルーディン氏は、この州教育委員会の決定を不服としてシュトゥットガルト行政裁判所に訴える。争点となったのは、氏の宗教の自由と、公教育に携わる者の「中立性」のどちらが優先されるべきかという点であった。ルーディン氏は、スカーフを着用する行為は、宗教的戒律の実践というよりも、信教も含めた自身の人格の表現であると主張した。一方、シャヴァーン大臣にとって、「スカーフ」は単なる宗教的シンボルではなく一すなわち、宗教の自由として守られる権利の一つではなく一、文化的差異を強調する政治的シンボルであり、女性の自由の束縛を正当化する危険性を持つものであった。2000年3月24日に出た判決は、スカーフをはずす用意のないルーディン氏は、再び教員としての適性に欠けるとした⁵。氏は、さらに、州高等行政裁判所（2001年）、続けて連邦行政裁判所（2002年）に上訴するが判決は覆らなかった。最終的に、2003年9月、ルーディン氏は連邦憲法裁判所に上告する⁶。この判決では、スカーフを理由に教職に不適正とした州の判断は、基本的人権、特に宗教の自由の侵害であり違憲であるという一定の判決がでた。一方で、連邦裁判所は、公教育にかかわる教員の「中立性」について州法に条項があれば、その採用決定を正当化することができるという見解を表明した。すなわち、立法者（すなわち州議会）は、許容される宗教的シンボルについて新たに法を作成することができる、との見解を示したのである。バーデン・ヴュルテンベルク州はこの判決をうけて、翌2004年4月には、公教育の場でスカーフを禁止する教育法改正を議決した⁷。

3 1998年7月13日付、バーデン・ヴュルテンベルク州文化・青少年・スポーツ省公報 (No.119/98) Oestereich, Heidi: Der Kopftuchstreit. Das Abendland und ein Quadratmeter Islam. Frankfurt am Main 2004, S. 37ff. より引用

4 In: Oestereich, Heidi: S. 36ff.

5 シュトゥットガルト行政裁判所判決 1 5 K 532/99. In: Oestereich, Heidi: S. 51.

6 2003年9月24日付、連邦憲法裁判所判決。書類番号 2 BvR 1436/2, Randnr: 30. In: Oestereich, Heidi: S. 57f.

7 興味深いのは、キリスト教の十字架、ユダヤ教のキッパ（帽子）については、キ

宗教の自由と、公務員の中立性をめぐって続いてきたこの「スカーフ」をめぐる議論は、上のシャヴァーン大臣の発言からも読み取れるように、女性を抑圧するイスラム急進主義や原理主義に対する、ドイツ社会の危機感の表明という意味合いが大きい。長期にわたった裁判のさなかに、アメリカでの連続テロ事件が起きたことも無視できない。当時、アフガニスタンのタリバン政権と、その暴力的な独裁政治、特に女性に対する抑圧には批判が集まった。ヨーロッパに住むイスラム女性の「スカーフ」に、このような極端なイスラム原理主義の影を見て取ろうとし⁸、政治的挑発であると理解する傾向が、格段と強くなったのである。

スカーフをめぐる議論は、その後も続いている。2006年10月中旬、緑の党議員のエキン・デリゲズ、社民党のラレ・アクギュン、法律家のセイラン・アテシュの3人のトルコ出身の女性たちが、「(女性抑圧のシンボルである)スカーフをはずして!」とムスリム女性たちに呼びかけるアピールを出した⁹。この発言は、在独トルコ人協会などのイスラム団体や、トルコの大衆紙から猛烈な反論も浴び¹⁰、アピールを出した女性たちには脅迫メールや脅迫状が届き、警察が身辺保護をする事態となった¹¹。デリゲズ氏は、公共放

リスト教的、または西欧的な文化と教育の伝統を教育の場で考慮することを定めている現行の教育法の理念を重視する形で、禁止されなかったことである。それに対し、「スカーフ」は、宗教的シンボルであるかどうかは一義的ではなく、「政治的」シンボルとしても機能しうるという理由で禁止された。2006年11月現在、バーデン・ヴュルテンベルク州と並んで、バイエルン、ヘッセン、ニーダーザクセン、ザールラント、ベルリン、ノルトライン・ヴェストファーレンの各州が、公立学校で教員がスカーフを着用することを禁じている。

8 ルーディン氏についても、背後にイスラム原理主義団体があると危機感をあおる記事が、『シュピーゲル』誌や、フェミニズム雑誌『エマ』に掲載された。Vgl. Oestereich, Heidi: S. 115f.

9 Legt das Kopftuch ab! Prominente Deutsch-Türken appellieren an Musliminnen in Deutschland. "In: Bild am Sonntag. 2006. 10. 15. オンライン版は、<http://www.bild.t-online.de/BTO/news/aktuell/2006/10/15/kopftuch-streit-moslem/kopftuch-streit-moslem-integration.html#> (最終アクセス2006年11月27日)

10 トルコでの報道は、以下のドイツでの新聞記事に紹介されている。Gülfirat, Suzan: „Schämt euch“ – Wie türkische Blätter über die jüngste Kopftuch-Debatte berichten. In: Der Tagesspiegel. 2006. 10. 26. <http://www.tagesspiegel.de/berlin/archiv/23.10.2006/2851794.asp#> (最終アクセス2006年11月27日)

11 アピールを出した弁護士セイラン・アテシュは、抑圧や暴力に苦しむトルコ人女性たちの権利を守る弁護士活動を行っていたが、日増しに暴力性を増す脅迫や暴力

送ARD局のテレビニュース『ターゲス Schau』において、11月1日、「私は、スカーフの禁止を法律にしようともなければ、制裁しようともしていない。(…) 自由意志でスカーフを着用する女性たちがいることはもちろん承知している。私にとって重要な問題は、まさに、女性たちが、外的な圧力からではなく、(スカーフを着用するかどうか) 自分自身で決断する自由を持つということなのだ。まだまだ声を出すことができず、外に意思表示ができない女性たちもいる。彼女たちのための代弁者に私はなりたいと思っているのだ」と述べている。

ドイツに暮らす移民女性たち自身は、多かれ少なかれ、こういった議論について立場表明をすることを求められる。スカーフを着用するのか、しないのか、それはどのような理由によるのか。また、イスラムに対して、ホスト社会ドイツに対して、どのような立場をとるのか、といった問いが彼女たちにはつきつけられているのである。

これらの社会的問題を看過することはもちろんできないが、実際にドイツで生活する移民たちの生活や価値観は、非常に多様化している。移民たち＝「移民問題」という等式は当然のことながら成立しないのである。次に、その多様性を体現している移民たち自身による表現に目をむけてみたい。

2. トルコ系移民女性たちの自伝

移民の女性たちの状況に対する社会的関心とおそらく無縁でない形で、ドイツでは近年、イスラム女性たちの自伝が相次いで出版されている。大きく分けてこれらの自伝には二つの傾向を確認することができる。一つは、主にジャーナリストや作家として仕事をする女性たちによるもので、ドイツで一定の社会的地位を築いた彼女たちの、二つの文化と社会の間を行き来する日常を描いたものである。他方は、親の世代との深刻な葛藤や、強制結婚や家庭内暴力から苦勞して逃れた女性たち（中にはその結果、ドイツ社会での成功を手にする例もある）の体験をつづったものである¹²。異色な例としては、

に危機感を持ち、この「スカーフ議論」以前の、2006年9月に弁護士業をやめている。

12 例として Y., Inci : Erstickt an Euren Lügen. Eine Türkin in

ポップス歌手としてのキャリアを捨てて、厳格なイスラム教徒となり、スカーフを身につけ、舞台にあがることをやめたヒュルヤ・カンデミールの自伝『天国の娘—ポップスターからアラーへの道』(2005)¹³ がある。

ここでは、軽やかに二つの文化の間を行き来する女性の自伝について、一つの例をみてみたい¹⁴。『ハンスを一つ。刺激的なソースをかけて』¹⁵ というユーモラスなタイトルを持つこの本は、フリー・ジャーナリストとして左派の新聞やフェミニストの雑誌に記事を書くハティシェ・アクユン (Hatice Akyün, 1969-) の自伝である。3歳のとき、家族とともにドイツに移住した彼女は、トルコ人とではなくドイツ人「ハンス」と結婚したいと考えているが、そのハンスも、情熱にあふれたトルコ人男性のように「刺激的なソースがかかっている相手を求む」というのがタイトルの意味である。アクユンは、外国人労働者としてドイツにやってきた両親との葛藤や、イスラム教に対しても、またドイツ社会に対してもそれぞれ異なる立場を持つ4人の兄弟姉妹たちとのやりとりを、軽妙な口調で語る。両親を訪ねるときには、父親との喧嘩を避けるために、途中で半そでのブラウスとひざ下まであるスカートに着替え、母親が彼女の部屋を訪れるときには、胸の開いた服とハイヒールを隠す¹⁶。親の価値観には従わないながら一定の敬意を示し、自分の世界と、両親と共有する世界とをしたたかに住み分ける彼女の日常が、ユーモラスに紹介される。ドイツ人の知人、友人たちとのかかわりについても描写され、彼らのトルコ人女性に対する先入観を軽妙な皮肉で笑い飛ばしてもいる。ドイツ人の友人が、彼女に「強制結婚をしなくてはいけないのか」と質問したときには、「もちろん。結納にはラクダを4頭贈るのよ。」¹⁷ と冗談で切り

Deutschland erzählt. München 2005., Kalkan, Hülya: Ich wollte nur frei sein. Meine Flucht vor der Zwangsehe. Berlin 2005., Ates, Seyran: Große Reise ins Feuer. Die Geschichte einer deutschen Türkin. Berlin 2003.

13 Kandemir, Hülya: Himmelstochter. Mein Weg vom Popstar zu Allah. München und Zürich 2005. (図版2)

14 ほかにこのカテゴリーに属する自伝として Güngör, Dilek: Unter uns. Berlin 2005.

15 Akyün, Hatice: Einmal Hans mit scharfer Soße. Leben in zwei Welten. München 2005. (図版3)

16 Akyün, Hatice: S. 75.

17 Akyün, Hatice: S. 104.

返し、また「ドイツ語がお上手ですね」とほめられれば、「ありがとう。でもあなたも上手ですよ」¹⁸と皮肉をこめて答えてみせる。さらに、「正直言えば、父が強制結婚させてくれればよかったのにと、時々思うことがある。そうすれば、苦勞して良い相手を探そうとしたり、いらぬ希望をもったり、おなじくらい絶望したりという経験をせずにすんだのだから。」¹⁹となかなか理想のパートナーに恵まれない自分を笑ってみせたりもする。

終始軽妙な調子で語られるこの本でも、「スカーフ」問題は中心的なテーマになっている。学校に行く路上でひそかにスカーフをはずしたこと²⁰、一方で母はスカーフを自分が属する文化の一部とみなし決してはずさないこと。著者の姉は「ケンゾーやベルサーチ、バレンチノなど」²¹最新モードのスカーフで着飾っていること。著者がジャーナリストとして、タリバン政権崩壊直後のカブールに取材した際は、アラブ系の名前と久しぶりに着用したスカーフのおかげで女子刑務所の取材まで許されたこと、そして、そのカブールの街では、スカーフがなければ「まるで裸でいるような気持ち」になったことなどが述べられる²²。著者は、上に述べた「スカーフ論争」以来、ドイツ人の友人からも、またイスラムの友人からも、「スカーフ」についての意見を求められるようになったと述べている²³。スカーフにまつわるこれらのエピソードを語ることが、友人たちに対する、また読者に対する著者の答えだといえるだろう。

しかし、この本のテーマ自体は、ドイツの社会とトルコ出身の家族、両方の文化と社会でそれぞれに居心地の良さを感じている彼女の日常の報告である。イスラム女性＝抑圧された女性というステレオタイプに抵抗するかのよう、彼女は、移民としての日常を楽しむ女性として、自分の姿をアピールしようとしているようである。実際に、移民女性の自由を阻止しようとする

18 Akyün, Hatice: S. 171.

19 Akyün, Hatice: S. 105.

20 Akyün, Hatice: S. 69. 幼い彼女はそれを喜んでいただけだが、校長が、スカーフを許さなかったということにも言及されている。1998年以降のスカーフ禁止議論以前、個々の教育現場では、おそらく日常的にこのような「禁止」が行われていたことが推測できる。

21 Akyün, Hatice: S. 70.

22 Akyün, Hatice: S. 74.

23 Akyün, Hatice: S. 181.

攻撃が激化し、また、ここではとりあげなかった別のタイプの自伝が示しているように、父権的な価値観のもとで生命の危機を感じるほどの苦難を体験する女性たちもいる。しかし、アクユンのような存在も決して例外的に幸運なケースであるというわけではない。こと、「移民問題」を体現する存在として表象されることの多い移民のイメージに対して、アクユンはこの本で、賢明な抵抗を行ったということができらう²⁴。

3. 映画『壁に当たって』(2004)における移民の表象

次に、映画における移民女性の表象について分析してみたい。題材とするのは、2004年ベルリン映画祭でグランプリの金熊賞を獲得した映画『壁に当たって』(“Gegen die Wand“ 邦題『愛より強く』)²⁵である。監督はハンブルク生まれのトルコ系移民ファティ・アキン(Fatih Akin 1973-)である。彼は、これまでも、ハンブルクのトルコ系移民たちを描いた“Kurz und Schmerzlos”(1998)、トルコ系女性にひとめぼれしイスタンブールに向かうドイツ人の旅を描いた、“Im Juli”(2000、邦題『太陽に恋して』)、イタリア系移民の家族の物語“Solino”(2002)など、一貫してドイツに生きる移民たちを描いた作品を発表してきた。長編映画としては4作目となるこの『壁に当たって』では、ハンブルクとイスタンブールを舞台に、ドイツに住むトルコ系移民の恋物語を描いている。ベルリン映画祭でのドイツ映画の受賞が18年ぶりであったこと、さらにその「ドイツ人」監督がトルコ系であったこと、主演を演じた女優が、映画初出演であったにもかかわらず強烈な印象を残したことで話題になった²⁶。受賞決定の瞬間、監督アキンはトロフィーをかかげ「受賞者はこんな奴だ」と繰り返し叫んだという。後に彼はその理由をたずねられて「アウトサイダーだと思われる我々が受賞

24 ちなみに、この本は出版後1年の間に5版を重ねている。

25 本論では、邦題ではなく、原題の日本語訳を用いる。(図版4)

26 映画の受賞と同時に、大衆紙ビルトが、主演女優シベル・キケリがポルノ映画に出演した経歴があることを扇情的に書き立て、さらに映画の中のシベル同様、彼女自身がこの報道をきっかけに両親に勘当されたと報じたことなどが一逆説的に一彼女への注目度を高めたことも否めない。

27 Ein Gespräch mit Helmut Ziegler. In: Der Tagesspiegel. 04. 2. 27. Zitiert aus: Akin, Fatih: Gegen die Wand. Das Buch zum Film.

したことを強調したかった」²⁷と答えている。移民である彼は、ホスト社会の文化の一部として移民文化を発信していくことの重要性を、非常に強く意識している。デビュー作発表の際、彼は、「スコセッシンや他のイタリア系アメリカ人たちも、彼らの映画を作るようになるまで70年かかっている。アルジェリア系フランス人が彼らの映画をつくるのにも30年かかった。彼らに比べれば、自分たちはずいぶん早くスタートできたのだ。」²⁸と述べている。

それでは、彼の一番の成功作となった『壁に当たって』における移民女性の表象のされ方を分析してみたい。

1) 女性の自由と「偽装結婚」

映画は、イスタンブールのボスポルス海峡を背景に演奏する古風な楽団の歌で幕をあける。トルコ語で歌われるセンチメンタルでメランコリックな愛の歌は、幕間の狂言回しのようにこれから始まるストーリーを暗示する。ヨーロッパとアジアの境界とされる海峡の海と空とが印象的なこの光景のあと、舞台はドイツ第二の都市ハンブルクの薄暗いクラブの映像に切り替わる。コンサート後、フロアの片付けをしながら、客が飲み残したビールをあおる四十男が主人公ジャイトである。いかにも世捨て人といった風采のあがらない彼は、行きつけのバーで騒動を起こして追い出されたあと、車を猛スピードで飛ばして壁に激突する。むちうち程度のケガで生き延びたジャイトであるが、郊外の病院に入院し、自殺を試みたことから精神科の診察を受けることになる。精神科の待合室でそのジャイトのことをずっと見つめていたのが、手首に包帯を巻いた若いトルコ移民の女性シベルである。ジャイトが診察室から出てきたとたん、彼女は、トルコ語で唐突に「トルコ人よね？私と結婚しない？」²⁹と話しかける。

この言動の奔放さだけでなく、シベルの外見もまた、いわゆるステレオタイプの在独トルコ人女性にはあてはまらない。デコルテが広くあき体のライ

Drehbuch/Materialien/Interviews. Köln 2004, S. 242.

28 Akin, Fatih: Gegen die Wand. S. 222.

29 Akin, Fatih: Gegen die Wand. S. 30f. 以下、この台本からの引用は本文中にページ数のみをあげる。出版された台本とDVD版とでセリフに違いがある場合は、原則としてDVD版のセリフを引用し、相当する台本の箇所をあげる。

ンを強調するカットソーを着て、コケティッシュな視線でジャイトを見つめる彼女の魅力的な姿は、病院の待合室には不似合いでさえある。しかし、徐々に彼女の自殺未遂の原因と、突然の求婚の原因が明らかにされる。外見的には「自由な女性」に見えるシベルであるが、異性と手をつないで歩いていたことを理由に兄に鼻の骨が折れるほどなぐられた経験があり、娘の純潔と伝統的な家族のモデルを重視する父親と兄の価値観を大きな拘束と感じている。自傷行為は、この価値観に対する抵抗の表現にほかならない。その父と兄を納得させ、「家族の名誉」を傷つけない形で自由な生活を実現するための手段は、唯一「結婚」という形で家族を離れることであった。「私は生きたいの。踊りにも行きたいし、オトコとも寝たい！それも一人じゃなくて、たくさんのおトコとよ！」(S. 39)とシベルは叫ぶ。それでも彼女の求婚にこたえないジャイトの前で、シベルは再び手首を切る。彼女自身コントロールできないでいる「生きたい」という欲望と、それが認められない状況の間にはさまれ、抜け道を見出せない彼女は、他の表現方法を持たない。しかし、その切羽詰った表現の力強さにジャイトは圧倒されてしまい、結局、その偽装結婚に同意することになる。こうして、お互いの生活に干渉しないという約束のもと、二人の奇妙な偽装結婚生活が始まる。

この「偽装結婚」というテーマは、ドイツの観客、批評家に、まさに移民社会、特に、ムスリムの女性がかかえる問題として受容された部分である。いわゆる伝統的な家族観を重視し、娘の自由を拘束するとされる父権中心主義は、ドイツおよびヨーロッパで絶えず繰り返され補強されるトルコ人男性のステレオタイプの一つである。しかし、映画の中で、シベルの父や兄の抑圧は示唆されるのみで具体的には描かれない。ジャイトとの結婚についても、彼にいくつか疑わしい点があるにもかかわらず、父と兄はそれを追求せず、シベルの意志を尊重する。これはしかし、父と兄にとって、娘の結婚相手がトルコ人だというただ一点が重要であったと解釈することもできるだろう。後に、ジャイトがシベルをめぐる喧嘩の末に殺人事件を起こすと、殺人者の妻となったシベルは家族から勘当される。父は幼少期からのシベルの写真をすべて焼却し—しかし、その父の目には涙がある—、兄は、「私には妹などもういない」(S. 159)と語る。

一方、手段としての「結婚」を実現し、手に入れた自由を奔放に楽しむシ

ベルは、したたかに「偽装結婚」生活を送る。しかし、「結婚」と「家庭」を重視する価値観を、彼女自身内面化している。結婚式からジャイトの部屋に戻った際、シベルは、トルコの風習に従って彼女を抱きかかえて部屋に入るようジャイトに要求する（図版5）。同居が始まるとすぐに、ビールの空き缶とゴミにあふれた混沌としたジャイトの部屋を、全財産をはたいて家庭的な空間に整え³⁰、二人の結婚式の写真を写真立てに飾る。「多くのオトコと寝たい」という欲求を実現するために、いわば親密さや愛情とは無関係な関係を目指していたシベルであるが、ある種の「家庭らしさ」を否定するわけではない。

次第にお互い恋愛感情をいただくようになるなかで、母に教わったというトルコ料理を作るシベルは、ジャイトに「お前と結婚するのは、悪くない考えだったかもしれないな」（S. 112）と言わせさえする。しかし、シベルは、「偽装結婚」にこだわり、二人の間の肉体関係を拒否する。夫と妻という関係になり、「主婦」になることを避けようとするのである。

2) 二人の女性

「妻」や「主婦」になることを避けて、それではどのような「自由」をシベルは手にいれようとしているのだろうか。シベルの身近にいる二人の女性の描かれ方に注目することで、シベルの求める自由について考えてみたい。

シベルの母親は、極端な行動に出る娘シベルの身を案じてはいるが、父や兄に対して正面から反論することはない、また、彼女に具体的なアドバイスをすることもない。シベルの苦しみを共有しながら、ただ見守るだけの存在として描かれる³¹。家出するのではなく偽装結婚という形をとったのは、この母を苦しめないためなのだ、とシベルもジャイトに説明している（S. 58）。しかし、シベルは、実際の「結婚」はせず一すなわち自らの家族を作ろうとはせず一、母がそうであったような「妻」や「主婦」になろうとはしないの

30 DVD版には収録されていないが、台本では、すっかり家庭的になった部屋をみて、ジャイトが、「ひどいな。なんだかトルコ風だ」とつぶやくセリフがある。S. 78.

31 たとえば、冒頭の病院のシーンにおいて、厳しい言葉をシベルに投げかけた父と兄が立ち去ったあと、シベルはタバコに火をつける。母は、シベルとともに喫煙しながら、いわば、シベルのかかえているストレスを共有するのである。S. 33.

である。

もう一人、シベルに大きな影響を与えるのは、結婚の介添人となる従姉セルマである。イスタンブールの高級ホテルでキャリアウーマンとして働く彼女は、「解放された」憧れの女性として描かれる。映画の後半、ジャイトが殺人の罪で逮捕され、家族から勘当されたシベルは、イスタンブールの彼女のもとで居候生活を始める。ビジネス・スーツに身を包んだセルマは、最新のオーディオ機器やトレーニング器具をそろえた高級マンションで優雅な独身生活を送っている。いつかホテルのトップに登りつめることを目指している彼女は、「信頼できるのは自分だけ」³²と語る、自由も独立も手にいれた女性として描かれる。しかし、シベルは次第に、自宅と職場を行き来するだけの生活を送るセルマを軽蔑するようになり、「だから夫に逃げられたんでしょう」(S. 152)と暴言を吐く。映画の中で、セルマ自身が自分の離婚経験や単身生活について悩むシーンはなく、生活に不満な様子は描かれない。つまり、このシベルの言葉は、セルマのような独立した生活を肯定できないでいる、彼女の価値観の表明として解釈できる。家族間の調整役に徹している母の姿も、また、家族を持たずに独立して生活するセルマの生き方も、シベルには目標とはなりえないのである。

ジャイトのいないイスタンブールの生活に自暴自棄になったシベルは、セルマの家を出て薬物を求めて街に出る。シベルが求める自由は、いわば刹那的なものにとどまっていた、その結果、夜の街でシベルは身体的にも精神的にもぼろぼろになり、暴行を受けて重症を負う。数年後、刑期を終えたジャイトがイスタンブールにやってきてシベルと再会しようとしたとき、多くの痛みを生き延びたシベルは、「主婦」として、また一人娘の「母」として生活している³³。夫の旅行中、シベルはジャイトと愛を確認する一夜を過ごす。結局、安定した家族との生活を捨てることはできず、一緒にジャイトの故郷に行こうという彼の誘いには応じない。一定の自由を楽しんだあと(ま

32 S. 144のシーン。ただし、DVD版にあるこのセリフは台本にはない。

33 DVD版では描かれていないが、台本によれば、夫になっているのは、瀕死の状態で倒れていたシベルを助けたタクシー運転手である。つまり、この夫との関係は、見合いや紹介などによるものではなく、恐らく恋愛関係のなかから生まれたものであると推測できる。

た、その対価としての痛みも味わったあと)、シベルは自分の母親と同じように、主婦として、母として、家族を守るのである³⁴。

3) 二つの都市—ハンブルクとイスタンブール

シベルが育ち、そして逃亡することになるハンブルクと、彼女の逃亡先となるイスタンブールとは、この映画では対照的に描かれている。

シベルやジャイトが暮らしているハンブルクは、豊かな商業都市としてのそれではない。街のシンボルである市の中心の湖や、その周囲の目抜き通りは一度も映像の中には登場しない。二人が出会う郊外の病院、その窓から見えた寒々とした森、深夜の乗客のいないバス、薄暗いバーやクラブ、そして、シベルの家族が住む画一的な建物が並ぶ郊外の団地が、この映画のハンブルクである。登場人物たちは、薄暗いバーで酒をあおり、薬物を使い、あるいはクラブのコンサートで踊る刹那的な生活を送る。シベルが、若い身体を得意げにさらしながら、クラブの音楽に身をまかせて踊り自由を謳歌している一方で、40代にさしかかっていると思われるジャイトや、その女友達マレンたちは、その自由にも疲れ果てた面持ちでバーで時間をつぶす。この映画のなかで、唯一都市のきらびやかさを感じさせるのは、シベルが一人歩き回る移動遊園地の光景である。偽装結婚に始まった二人が、お互いに恋心を感じていることに気づいたシベルは、さまざまな色の光に満ち溢れた夜の移動遊園地で、いわば、ひと時夢の時間を過ごす。

一方、イスタンブールの光景は、まず映画の冒頭で、陽光に満ちた空と海を背景とした解放的な場所として映し出される。上述したように、ボスポルス海峡を前に古風な楽団が恋の歌を奏でており、その背景には、イスタンブールのランドマークであるブルーモスクのミナレットが見える。セルマが働くホテルの最上階のバーからのイスタンブールは、光と動きに満ちた眠らない大都市の様相をみせる。ハンブルクの移民の家庭で、「家族の名誉」を重視する父や兄のもとでシベルが感じていた窮屈さ、シベルの母が顔に深く刻ん

34 このシベルの選択を、自由とその代価を経験したからこそそのしたたかさ、意志の強さと解釈することも可能かもしれない。しかし、他方で、シベルが、セルマのように社会的経済的に独立するための前提となる教育を受けていないために、「自由」を獲得する選択肢が限定されていたことも指摘しておく必要があるだろう。

でいる諦念は、少なくともセルマを中心に描かれるイスタンブールには存在しない。シベルは、ジャイト宛の手紙で次のように報告している。「イスタンブールは、にぎやかな街で、命があふれている。この町で、生きていないのは、私だけ」(S. 147)。もちろん、生に満ちた都市として描かれるこの街にも、シベルが経験しなければならなかったような危険が隠されてもいる。

ドイツのなかでも特に「自由」な都市としてのイメージを持つハンブルク³⁵が、この映画の中では、いわば鬱屈したフラストレーションをかかえた薄暗い街として描かれ、他方、アジアとの境界にあるトルコの都市イスタンブールが、きらびやかな光とエネルギーに満ちた混沌とした大都市として、またシベルやジャイトの再出発を可能にする街として描かれていることは興味深い。

4) トルコ系移民ジャイト

シベルがかかえていた問題が、いわば、トルコ系移民の女性の典型的な問題であったのに対して、夫となるジャイトがかかえる問題は、必ずしも彼がトルコ系移民であることからくる問題ではない。ジャイトの移民社会との葛藤は、シベルと偽装結婚をしたことで初めて生じたとさえいえる。シベルの父親への挨拶、シベルの兄や従兄弟たちとのやりとりの中で、トルコ語さえおぼつかなくなっているジャイトは、しばしば疑いの目を向けられる³⁶。むしろ、定職を持たず、アルコールと薬物に頼るジャイトの状況は、彼の個人的な問題として描かれる。妻を亡くして以来、彼は音楽活動をやめ自暴自棄になり³⁷、いわば死んだような生活を送っていたのである。

35 14世紀からハンザ都市として栄えてきた歴史を持つこの街は、現在でも州の権限を持つ特別市である。港湾都市であること、またカトリックよりもプロテスタントが勢力を持つ都市であることから、性産業の多様さを許容する街というイメージを持つ。

36 シベルの兄は、ジャイトの下手なトルコ語をたしなめ(S. 52)、また、従兄弟は、娼婦を買う話についてジャイトが話に加わらず、「どうして自分の妻とヤラないんだ」と言ったことに対し激怒する。「トルコ人の女たちについてやるなどという言葉は使うな」(S. 101f.)というのである。

37 DVD版では、亡くなった妻の存在は示唆されるだけであるが、詳細は語られない。しかし、シベルがこの妻について質問しようとするジャイトが激昂することから、彼女の死が彼にとって、ある種の傷であることが示唆されている。台本では、妻の事故死のいきさつについて、ジャイトがシベルに詳細に語るセリフがある。S. 176.

冒頭で、自殺未遂をしたジャイトの診察にあたったドイツ人の精神科医は、「あなたの人生を終えたいのならば終止符をうてばいい。でも、そのために死ぬことはないでしょう。ここでの人生をやめて、どこかへ行きなさい。何か意味のあることをすればいいのです。」(S. 29) と諭す。この時点では、ジャイトはこの言葉をはぐらかし、寒々とした北ドイツの冬空が見える窓の外を眺め、禁煙だといわれてもタバコを吸い続け、「あんたの方が、頭がおかしいんじゃないのか」と捨て台詞を吐く。しかし、この精神科医の言葉は、映画の終盤、ジャイト自身の言葉となる。刑期を終えてイスタンブールにやってきた彼は、従姉セルマをに、シベルはもうあなたを必要としていない、と告げられる。セルマを説得し、シベルの連絡先を聞くために、ジャイトは次のように語る。

「俺はシベルに会ったとき、死んでいた。彼女に会うずっと前から死んだも同然だった。そこに、彼女が、俺の人生の中に天から落ちてきた。そして彼女は、俺に愛とパワーをくれたんだ。わかるかい？」³⁸

つまり、奔放に自由を楽しみ、またジャイトが刑期を終えるまで待つと約束したシベルの存在は、人生の意味を失っていたジャイトに、新しい生活へのスタートを決意させる存在となっていたのである。

従姉セルマの仲介で二人は再会するものの、シベルは彼女の安定した生活を選び、ジャイトは一人、故郷の街へと旅立つ。二人の恋愛物語としてはハッピー・エンドではないが、シベルによって「生」を得たジャイトと、あらゆる痛みをこえて「家庭」を持ったシベルが、それぞれに自分の生活を続けていく意志と希望を感じさせる終わりになっている。

4. 表象の戦略

ここまで、移民女性による自伝と、移民男性によって製作された映画における移民女性の表象をみてきた。

2章でみたアクユンの自伝は、移民の女性の生活に関心をもつ読者に、二

38 S. 166. ちなみに、ドイツ語とトルコ語の二言語が用いられるこの映画の中でこのセリフだけが英語で語られる。この映画の言語スイッチングの問題については、あらためて論じることとしたい。

つの文化と価値観の両方を生きる彼女の日常を伝えるという明確なメッセージを持ったものである。彼女自身や家族の生活が、当事者の視点から語られ、「ある移民女性の真の姿」を読者に伝える機能を果たしている。ユーモアに満ちた彼女の語り口は、しかし、軽々と二つの価値観の間を行き来する彼女の姿が、どこか演出されたものであることにも気づかせる。

一方、3章で考察したアキンの映画は、ハンブルクに住む移民たちの生活についてのドキュメンタリーではなく、描かれるシベルやジャイトの姿は、決してトルコ系移民たちの「現実」の姿ではない。しかし同時に、アキン自身がハンブルクで育っていること、主演を演じた二人もまたトルコ系移民であること、監督が繰り返しこの映画は自分にとって「個人的な」映画であると述べていること³⁹から、この映画にある種の「真正性」を見ることもできるだろう。だからこそ、この映画の中のシベルという女性の強烈な個性は、「抑圧に耐えるイスラム女性」といったステレオタイプを壊す可能性を持ち、また、キャリアウーマンとして働く従姉セルマの姿は、ハンブルクよりも可能性にあふれた大都市であるイスタンブールのイメージに信憑性を与えるのである。

それでもなお、映画製作会見の際、監督アキンが、「百回も『ガストアルバイター（外国人労働者）』という言葉の意味を説明せねばならず」、「この概念を断固拒否しなければならない」ほど、ホスト社会の認識は、現在の移民たちの現実—移民たちがみな「労働者」なのではなく、アーティストも国会議員もいるという—に追いついていないことも明らかになったという⁴⁰。実際に起こっている事件や、政治的な議論を背景に、ともすると「移民問題」として、あるいは問題の「被害者」としてのみイメージされることの多い移民女性たちの姿が一つのプロトタイプとして固定化されてしまうことを回避するには、それぞれに多様な生き方をしている移民たちの、さまざまなイメージを戦略的に表象していくことが唯一有効な手段であろう。アクウンやアキンの仕事は、まさにそうした表象を作り出す戦略の成功例といえるが、より重要なのは、その表象を受容する側の姿勢の方かもしれない。

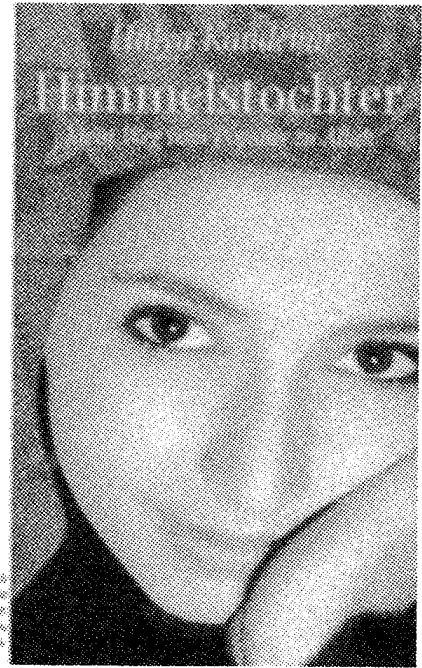
39 DVD収録のインタビュー。また、作家ザイモグルとのインタビューでの発言。

Vgl. Akin, Fatih: Gegen die Wand. S.233-237.

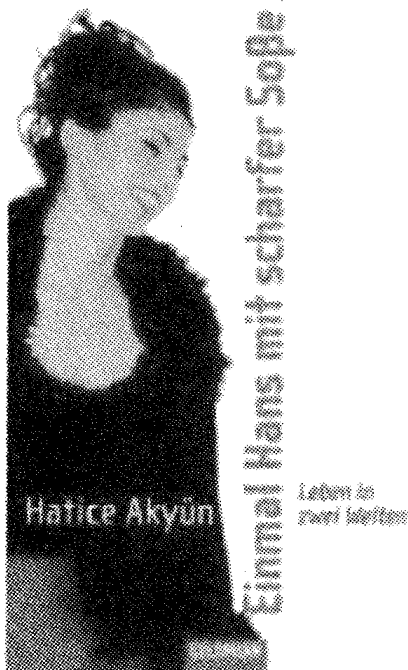
40 Nicodemus, Katja: Ankunft in Wirklichkeit. In: die Zeit. 2004. 2. 19. Zitiert aus : Akin, Fatih: Gegen die Wand. S.224.



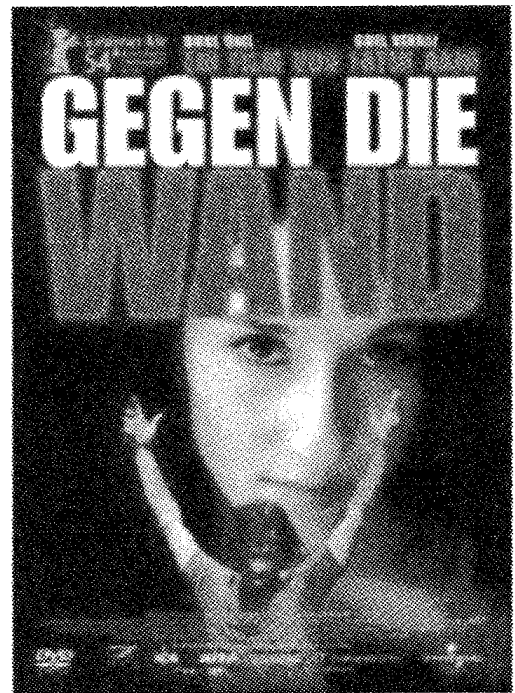
图版 1



图版 2



图版 3



图版 4



图版 5